

棚田に吹く風

2010
2月号
Vol.69
隔月刊

特集 写真で見る棚田の昔と今 1960年代の米づくり



棚田に吹く風 2月号 目次

4

シリーズ

棚田・里山からのたより

埼玉県横瀬町 寺坂棚田

開校9年目を迎える

寺坂棚田学校の取り組み

6

連載

榎原の稲作日記

ブック&ムービーレビュー

7

青柳健二の

「世界の棚田から」

田んぼの生き物たち

8

棚田博士は今日も行く

山形県鶴岡市

「日本海に面する庄内の棚田」

10

棚田調査プロジェクトレポート

11

棚田ネットワーク

Project & Topics

今回の表紙

「1965年頃の上倉沢の棚田」
(静岡県菊川市)

なんとも言えない懐かしさを感じる棚田の風景。この頃はこんな風景が当たり前のよう
に日本中に広がっていたのでしょう。

(モリサワ写真店提供)

棚田博士
総力取材!

特集

写真でみる棚田の昔と今

1960年代の米づくり

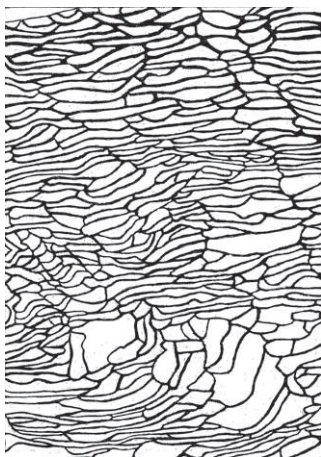
「1960年代の米づくり」、それはまだ耕耘機が広く普及する前、人力と畜力によって米づくりが行われていた時代でした。今回の特集では、棚田博士でおなじみ中山峰広代表が、静岡県菊川市上倉沢の棚田と愛媛県西条市千町の棚田を訪問。この時代の米づくりについてレポートします。

静岡県菊川市上倉沢

日本一！牛も入らない小さな棚田



【写真①】



【図①】



今回お話を聞かせていただいた上倉沢の元気な女性衆。実は表紙写真の左側・農作業する女性は堀一枝さん、上の写真後列右の女性その人なのです。

写真①は、1969年4月20日の新聞に掲載された静岡県菊川市上倉沢千框の写真。それをもとにして作成したのが図①である。面積10・1^ハ、枚数2742枚、棚田一枚の平均面積が0・4^ル。牛も入らないような小さな田圃だったので、作業はすべて人力によって行われていた。当時の作業について、堀ともえ（88歳）・堀一枝（84歳）・堀しげ（82歳）・山本きみ（82歳）・山本しげ（80歳）の5人の元氣なお年寄りから話を聞いた。

米づくりは【田打ち講（五穀豊穡を祈願する行事）】から始まった。毎年1月11日に田圃のなかに、土饅頭の上に御幣をつけた茅・萩・松を束ねたものを男手の数ほど立て、餅を供えた。4月になると【畦塗り】。柄の根元にティデーとよばれる泥はねを防ぐ器具をとりつけた畦塗り鉤を使い、畦を塗った。素足で田圃に入るので、茅の株が足にあたり痛かった。【田起こし】…エラ鉤を使い土を掘り起こす、力のいる作業。嫁になった当初は田圃に入らなくてよいと云われていた

が、2〜3年もすると一人前に働かされた。ここで田圃の仕事は中断、最大の収入源である一番茶の収穫が行われた。

再開後の作業は【放り田】。エラ鉤で掘り起こした土をひっくり返し、土塊をチョン、チョンと切り細かくして均す作業。【代掻き】…土を水になじませ均す作業。トウエとよばれる油紙の合羽を着ていたが、雨に濡れ身体が冷えた。身重の身体に障るといけないと姑が心配し、お爺さんより早く風呂に入れといわれ、涙を流すほど嬉しく、手を合わせ感謝した。【田植え】…最初に代縄を張り、尺棒を置いて植え付け、後はこれにのらう後退しながら作業をした。田植えが終わると【早苗振り】といい、一斉に仕事を休み柏餅をつくって食べた。

田植えの仕事が一段落して二番茶の収穫。それを終えて【草取り】。雑草を田圃に入って取る作業。2週間くらいの間隔で一番草から三番草まで行われた。頬かぶりしていても葉先が顔に触れ、傷に汗がしみて痛かった。【稲刈り】。刈り取った稲は田圃のなかでハズ（ハゼ）に掛け、乾燥したものを家に持ち帰って脱穀し、すべての作業が終わった。



右／1965年（昭和40年）頃の棚田写真。約2700枚の棚田は壮観だったでしょう。（モリサワ写真店提供）
左／現在の上倉沢。作っているのは140枚ほどになってしまいましたが、「上倉沢棚田保全推進委員会」のメンバーを中心に、周辺地域の方々と一緒になって棚田を保全しています。今年からはオーナー制度も始まります。





1955年頃の農作業。牛にクワを引かせて田んぼをなりました。そして田植え。もちろん手作業で行います。



早田清美写真集『千町棚田50年』より(左側2点)



【写真②】



当時の棚田のことを懐かしそうに語ってくれた、山内昭英さん。



愛媛県西条市千町 日本一！その数170段！

写真②は愛媛県西条市千町^{せんじょう}、1962

年9月11日撮影の空中写真。面積65^{ヘクタール}、枚数2500枚、棚田一枚の平均面積が2・6^{アール}、段数は170段ほど。上倉沢の千町より一枚の面積が大きく牛を使うことができたが、310^{メートル}の標高差があり、坂を上下して堆肥や収穫物を運ぶ作業に労力を費やした。

当時の様子を語ってくれたのは山内昭英さん(77歳)。山内さんは日本鉱業の白滝鉱業所があった山深い高知県大川村朝谷で生まれた。1943年(小学校5年生)に母親と2人で山を越え汽車に乗り、千町の親戚を訪ねた時、麦秋の季節で夕日に映え黄金色に輝く棚田の景色に圧倒され、原風景として心に刻まれた。その

風景が忘れられず高等小学校を終え鉱業所に1年数カ月勤務した後、1947年(15歳)に田畑があつた千町に戻ってきた。空中写真の1962年当時は30歳、郵便局に勤めながら農作業に従事していた。

5月、麦刈りが終わるとすぐに【犁き返し】が行われた。牛に牛鋤^{うまぐわ}を引かせ、

麦株の残る田面を犁き返す作業。牛はキンヌキといって去勢した雄牛、従順で使い易かった。しかし、最後に肉にする時安かつたので、金持ちは肉が高く売れる雌牛を持っていた。【荒搔き】…田圃に水を入れ、牛に馬鋤^{うまぐわ}(間隔の広い長いツメ)を引かせ土を細かくする作業。【畦塗り】…畦塗り鋤を使った。千町に來た当初、畦塗りが下手で通りかかった奥さんの妹に「クスツ」と笑われ発奮したという。【ム

クチ】…牛に馬鋤を引かせ土の天地返しを行う作業。【代掻き】…牛に代鋤^{しろくろ}(間隔の狭い短いツメ)を引かせ、土をさらに細かくして均す作業。【均し】…均し板で真っ平らに均す作業。水が多いと土の凸凹が見えず、少ないと土が動かず苦労した。

【田植え】…2〜3戸の結による共同作業で行われた。最初、三角定規(三角体の木枠)を用い後退しながら、後に転がし(ハッタン、8〜10角体の木枠)を用い前進しながら、苗を植えた。田植えの一連の作業を「五月」といい、「五月が終わったネ」とお互いに声を掛け合い合った。

田植えから2週間後、【転がし】が行わ

れた。回転刃のついた草取機を稲と稲の間に入れて転がし除草する作業。間隔を空け、縦横2回実施された。【止め草】…除草の最後の作業として、田圃のなかを這いまわるようにして残っている雑草を取った。【水管理】…モグラが畦に穴を開けることが多く、毎日水の見廻りを行った。

【稲刈り】…刈った稲は、家の近くに立てられている6〜10段の稲木^{いねぎ}(ハサ)に掛けて乾燥させた。急坂を運搬するのはきつい仕事だったが、普通10束を1つとして2〜3つを背負うか、力のある男は棒の両側に2つずつ突き刺し、担いで運んだ。この仕事は、その後に裏作の麦の播種が待っていたので、女から子供まで一家総出で行われた。

山内さんは当時のことを「仕事は厳しく苦しかったが、老若男女が生き生きと働き、集落に賑わいと活気があった」と懐かしそうに振り返られ、目の前にひろがる静かな山里を慈しむように見つめておられた。



棚田の形状は残ってはいますが、現在耕作しているのは210枚ほど。耕作放棄が進む棚田です。



上／棚田学校生徒による田植え
右／武甲山を望む寺坂棚田



開校9年目を迎える 寺坂棚田学校の取り組み

埼玉県横瀬町 寺坂棚田

寺坂棚田学校は開校以来今年で9年目を迎え、活動準備に入っています。

寺坂棚田は埼玉県西部に位置し、県内最大規模、最盛期には360枚を数えていました。この棚田は鎌倉時代には、既に耕作規模が完成されていました。北東に隣接する山に囲まれ、その谷間から流れる良質の水源を有しています。用水源は1.5km程上流にあり、水路を経て棚田に引き込まれています。南向きに広がる3町歩余りの棚田です。町を見守るかのようには正面に石灰岩の武甲山がそびえます。良質な土壌にも恵まれ、稲作には最適な条件がそろっています。その証拠としてこの地域からは石器や土器等が出土し、これらの石器類は横瀬町民族資料館に展示され、見学することができます。

平成14年に「寺坂棚田学校」を開校

全国的な時代の流れの中、ご多分にもれず農業よりも会社勤め、減反政策などで棚田は放棄され、雑木荒廃化の一途。50戸ほどの地権者のなかで耕作者はわずか4戸になっていました。そんな折、平成13年度

春、横瀬町役場振興課の企画発想で、農村生活体験交流事業の実施が地元の営農組合に委託され、放置された田畑の一部を還元利用し、「畑にトウモロコシ、田んぼには稲を作ろう」を合言葉に始まりました。スローガンは「都市と農村の交流を深めよう」でした。

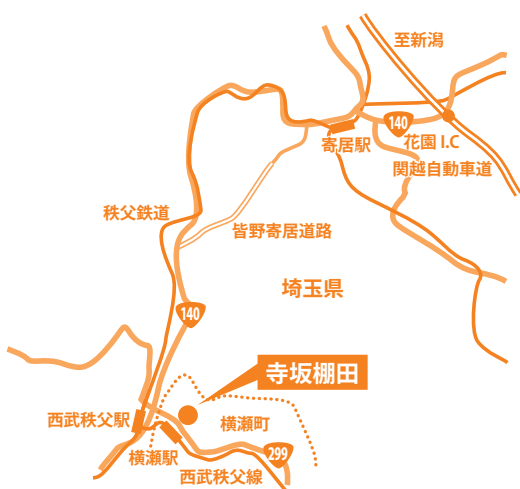
米品種選定は古代米(黒米)の先覚者である熊崎氏の提案で古代米を選定、技術指導をお願いする事になりました。作付面積は12㍓となり、応募による参加者は49名でした。参加者の多くは農作業初体験で、耕運機に振り回され、泥んこになつての田んぼ作業、指導員の手とり足とりの悪戦苦闘は予想以上のものでした。種まきから収穫作業に至る5回程の作業は和気あいあいな交流体験となり、大好評でした。当然の如く収穫祭が行われ、関係者全員満足感に満ちていました。この実績が礎となり、翌年の平成14年に「寺坂棚田学校」が開校される事になりました。

年間を通した12回の活動

寺坂棚田学校と命名、中隆義校長以下、



上／棚田学校指導員によるハサ掛けの指導
下／地元管理者による野焼き



埼玉県横瀬町は、自然の宝庫秩父盆地の東端に位置し、都心から70km圏内で、首都圏大規模レクリエーションエリアの主要圏域にあります。町のシンボルである武甲山をはじめ、周囲を囲む山肌の深い緑、そこから源を発し清流となって流れる横瀬川、澄んだ空気と四季に映える色とりどりの花、“うらか よこぜ”は山・水・空気といった自然の3要素がバランスよく揃ったまちです。

■ 棚田へのアクセス

【自家用車】 関越自動車道・花園ICより国道140号線→皆野寄居有料道路→国道140号線→上野町交差点を左折して国道299号線→町民会館前信号を過ぎたら左折

【公共交通】 池袋駅から西武特急むさしで飯能駅へ。西武池袋線西武秩父行きに乗り換えて横瀬駅下車徒歩15分

■ お問い合わせ

【寺坂棚田の学校】
☎0494-24-2388 加藤 忠さん

指導員19名、耕運機1台と農機具を借り受け、作付面積は昨年同様、品種は希少価値の高い古代米と餅米の二種類として、年間を通して活動回数12回に設定、栽培方法は有機無農薬として生徒32人でスタートしました。春先の耕転作業、代掻き、田植え、草取り、防鳥、稲刈り、脱穀、籾摺り等のポイント部分が活動の中心となりました。そして水管理、補修管理は指導員が担当する事にしました。

田んぼに初めて入り足が抜けずシリモチで泥だらけ、あぜ道で足をとられてスッテンコロリなどなど笑いがたえません。夏場の草取り作業は都会人には過酷。汗がぼとぼと流れ落ち汗拭する度に顔は泥だらけ、農作業の辛さを初体験。しかし通うごとにスクスク成長していく稲に感動、やがて稲穂が顔を出し実も膨らんで黄色

学校の定着、広がる活動

開校以来3年経過するなかで棚田学校の定着と実績が認められ、埼玉県、横瀬町などの広報協力により、テレビ、新聞等の取材も日常化されてきました。平成14年から15年にかけて、埼玉県の補助事業に

く変化してゆく、稲穂が下を向き水も抜かれ、さあ稲刈りです。初めてのカメラ使いも指導員の手ほどきで稲が刈られて行く、そして結束され、天日乾燥のためにハザ掛けされて行く。秋の空の下で古代米赤飯とトン汁の昼食は大好評でこのメニューは今でも受け継がれています。活動の総括と言える収穫祭は、餅つき、トン汁、赤飯等で交流、そして自分達で育てた収穫米を渡され、車のトランクやリュックなどに入れられ大切に持ち帰っていきました。

八割方再生、そして様々な役割を果たす場所へ

こうした棚田復元活動で八割方再生されていきます。当然の如く苦勞した裏方がいました。企画立案者、雑木切りと雑草刈り、

より木製用水路、農道整備、案内板、あずま屋等の整備で機能性と景観が改善されました。『学校行事』で追加された活動として、鉄道会社応募の一日体験ツアー、製薬会社（アストラゼネカ）研修の受け入れ、また3年前からかがり火を加えて「ほたるかがり火祭り」を実施、幻想的な景観を楽しむことが出来ました。またミニイベントとして、地元太鼓クラブの秩父屋台ばやし、二胡合奏、尺八等のオーナーと生徒による演奏は大好評となり、今後の発展性が期待できます。

野焼き、そして畦補修など地味な作業ですが、その立役者として棚田指導員はもとより棚田管理組合、地権者等の理解と協力、これらはボランティア精神で支えられています。更に数年前よりオーナー制の充実を図り、その成果は棚田復元と景観に多大に寄与しています。平成21年度実績として、学校生徒数63名、オーナー数25名（直接登録）、指導員数24名で活動しました。

最近ではハイキングマップにも記載され、カメラ撮影、絵かき、そして地元民の散歩など、棚田は様々な役割を果たす場所となりました。棚田学校校長として耕作者及び棚田に携わる関係者に深く感謝しております。貴重な棚田と貴重な景観を後世に残すお手伝いが出来ればと思います。

「寺坂棚田学校 校長 加藤 忠」

榎原の稲作日記

徳島県上勝町
榎原の榎田村

第六回

■榎田景観が文化財に

文化審議会は12月11日、「榎原の榎田を重要文化的景観に」と文部科学大臣に答申した。この号が発行される頃、指定されるそう。榎田を訪れる人々も増すことだろう。

■収穫祭がにぎやかに

10月25日、霧が峰々に掛かり始めていたが、50人余りの参加で行われた。松下さんが、鈴成りに実をつけた「庚申」という甘柿の手首程も有る枝を取って来て会場入口に飾りつけ、餅搗き臼、椅子、机など持ち込まれ、賑やかに。応援のオカリナグループが童謡「紅葉」「赤とんぼ」などを演奏、最後は阿波おどりでおひらきに。

■年頭は「初講」から

1月7日夜、榎原で昔から行われている「初講」という集落総会が開かれ、年間行事の道路の草刈りや神社修理など定められ、臨時行事である「鹿害防止のネット設置作業」の残務も1月20日から行う事に決定。総会といえども、15戸中4戸は、1701年の大災害の時、隣集落から移住、今も氏神さんも隣集落、おつき合いも隣集落。残り11戸で男性5人女性4人、計9名の参加、ほかに病欠1人、入院中1人。「ごんまりすぎる総会」だ。かつて33戸いた頃の怒鳴るような総会が懐かしい。

■冬仕事

冬の間に「田起こし」して土を凍らせると稲の生育に良いと「寒びき」していたが、いつのまにか早く「寒」になる前に終わらせている。

新潟の津南町では「2月9日の積雪」の話聞きながら、昨日も今日も北向きの坂道の車道の10センチの雪を掃いています。



うっすらと雪景色の榎田



谷崎 勝祥 71歳

編集部イチオシ! BOOK & Movie



MOVIE

『1000年の山古志』



2009年／120分
1000年の山古志製作委員会
各地で自主上映が行われています。下記ホームページをご確認ください。

●公式ホームページ
<http://1000yamakoshi.main.jp/>

2004年、新潟県中越地方を襲った中越大地震。全村崩壊から4年余りの山古志村の復興を追ったドキュメンタリー。千年にわたり厳しい自然と向き合い、榎田や産業を興し、命を繋いできた人々の、単に建物や道路を再建する復興ではなく、村で生きよとするそれぞれの復興を丁寧に描いています。中山間地の復興に挑む人々の姿を、ぜひご覧ください。



BOOK

『農に人あり志あり』 岸康彦編



¥2,310(税込)
創森社
2009年9月
A5版 340頁

山下惣一、宇根豊、白石好孝、山崎洋子、星寛治…。農に関心のある人なら心惹かれる名前ばかり。これら11人の熱い先駆者との対談集である。もとはグリーンチャンネル※で実施した対談番組で、「放送だけで終わらせるのはもったいない、何としても活字にして残したい」という編者の思いによって書籍になったというから、編者も相当に熱い人である。帯に「いざ現場発「農の世界」へ」とあり、平易な言葉で本質的な内容が語られていて、いま農業がどこにあるのか、どこへ向かえばいいのかが見えてくる。

※グリーンチャンネル…スカパー！エフエフV!とケーブルテレビで放送されている、競馬と農業の専門チャンネル

青柳健二の 世界の棚田から

マダガスカル・中央高地

「棚田には黄金色の稲穂がたなびき、赤とんぼが飛んでいる。コスモスが咲き、柿の実が真っ赤に熟している」

これだけ読んで「マダガスカル」をイメージする人はいないだろう。もちろん、日本と共通する部分だけ描写したからだが、決して嘘ではない。

マダガスカルに行こうと思いついたのは、当然「棚田がある」と聞いたからだ。私の性格上、聞いてしまえば行かないと気がすまなくなってしまうのである。ただ、アフリカに棚田？と、イランのときよりも半信半疑だった。棚田はアジアにしかないと思いつ込んでいた。しかし、調べてみると、コメの生産量が世界第20番目で、一人当たりの年間のコメ消費量にいたっては、世界でもトップレベルであることがわかった。それだけコメを食べる国に、猛烈に興味が出てきた。

アフリカ大陸の東海岸に浮かぶマダガスカル島は、南半球にあるため、3月は日本で言うところの「秋」で、標高1300m前後の中央高地では、稲刈りの季節だった。

目の前に広がるのは、日本の秋のような風景で、どこか懐かしさを感じる。しかも、市場へ行くと、粥の「バリスス」、米粉で作ったパン「ムフガン」、いろいろ風の「クバ」など、米食品も多い。

人々の顔つきも、アフリカよりアジアを感じる。それもそのはず、もともとマダガスカル人の祖先は、東南アジアから移住した人たちと、アフリカ大陸からの人たち、両方の血を受け継いでいるのだ。棚田の文化は、アジア由来なのである。

○青柳健二

1958年山形県河北町生まれ。学生時代、欧州を旅行中に偶然本屋で見た写真集に興味を覚え、大学卒業後写真を独学。アジア各国を取材旅行する中で、中国・雲南省で偶然出会った棚田の美しさに衝撃を受け、以来10年以上、日本・アジア・アフリカの棚田を撮影し続けている。著書に『日本の棚田百選』(2002, 小学館)、『アジアの棚田 日本の棚田』(2004, 平凡社)、『棚田を歩けば』(2007, 福音館書店)など。URLは <http://www.asia-photo.net/>



© Kenji Aoyagi

田んぼの生き物たち

第18回

ニホンヒキガエル



本州にはヒキガエルの仲間が3種類います。身近にいる種類としては、東日本に棲むアズマヒキガエルと、西日本に棲むニホンヒキガエルです。私が住んでいる鳥取県は、ニホンヒキガエルとアズマヒキガエルの両方が確認されている、珍しい場所です。鼓膜が目と同じ大きさか小さいと、ニホンヒキガエルです。



写真：桐原佳介

この寒い季節から、ヒキガエルたちはもう繁殖の準備にとりかかっています。棚田の奥の休耕田やため池などがその舞台。ヒキガエルの集団産卵は「がま合戦」と呼ばれていて、わずかのメスにたくさんのおスが群がって抱きつき、手足でライバルを押しつけてメスを奪い合うという、まさに合戦を繰り広げます。合戦中のオスは、時々

後ろの耳腺から白い毒液がでることもあるので、いじめ過ぎないように注意して下さいね。かつては民家の庭先によく現れたというヒキガエル。今でも皆さんのお家のそばに、さりげなく住んでいるかもしれませんよ。

(自然観察指導員 桐原真希)

棚田博士 は 今日も行く!

中島峰広の
全国棚田行脚

日本海に面する庄内の棚田

山形県鶴岡市 暮坪



鶴岡市は酒田市と並ぶ庄内の中心都市、平成の大合併で5町村を併合し、この地方で最も広い面積を占める都市になった。暮坪は、合併した温海町の日本海に面する集落、半農半漁を生業としている。(注1)

山形県棚田20選認定地 暮坪の棚田

2009年5月中旬、早朝東京を発ち、上越新幹線で新潟まで行き、羽越本線の特急「いなほ」に乗り換えあつみ温泉へ向かう。列車は大河阿賀野川の長い鉄橋を渡り、越後平野を北へ向かって走る。田植えが終わった広々とした田圃では、どんよりと曇った空の下、水面からわずかに頭を出している早苗がまるでコマ塩でも撒いたかのように小さな黒い点になって見える。やがて新発田。市街地の東、二王子の山頂近

くはまだらに雪が残り、背後の飯豊の山並は白一色、いまだ冬の装いであった。村上を流れる三面川を渡ると、越後平野に別れをつけ、山が迫る日本海に沿って走るようになる。鉛色の空と海、岸に白い波がたつ冬景色の日本海にはかすかに見える粟島が浮かんでいた。「笹川流れ」と呼ばれる海岸線は荒磯と漁港・漁村が入れ代わり現われ、まるで走馬灯のように繰り返し同じ景色を見ているようである。山形県に入ってもこの風景は変わることなく続き、あつみ温泉駅に到着した。

駅前から暮坪へは、鶴岡行きの庄内交通バスが走っているが、朝夕を中心にして1日4往復の便しかなく、歩くことにした。市街地を抜け、国道7号を海岸沿いに北上する。薄日が差してきて、海の色は明るくなってきたが、波は高く白く砕けていた。米子の集落と暮坪の人も利用する漁港を過ぎれば暮坪の集落。半農半漁といいながら、

狭い旧道の両側に厩を接して民家が建ち並び、漁村の雰囲気強い集落である。集落から再びバイパスになっている新道に出ると、海岸は奇岩の景勝地塩俵岩(注2)その北100メートルほどにガードを潜る農道があり、その前に『日本海(佐渡・粟島)と夕陽がみえる山形県棚田20選認定地暮坪』と書かれた案内板がある。しかし、この上に棚田があるとは思えないような樹木の繁る高い崖が立ちはだかっている。案内板に描かれている地図には67枚の棚田、そのうちの34枚で水稻が耕作され、33枚は畑作物に転作されているという。急坂の農道を60メートルほど上がると、ようやく暮坪という名前が示すような小さな区画の棚田が現われる。

棚田の先に広がる日本海

棚田は、段丘状の緩斜面に拓かれており、山際の転作地に建てられている手作りの

中島 峰広 (棚田博士)

早稲田大学名誉教授。学術博士。NPO法人棚田ネットワーク代表。棚田学会会長。全国棚田(千枚田)連絡協議会理事、棚田サミット開催地選定委員会委員長。1933年宮崎県生まれ。早稲田大学教育学部地歴科卒。2004年まで早稲田大学教育学部教授。著書に『日本の棚田一保全への取り組み』『百選の棚田を歩く』『続・百選の棚田を歩く』(以上、古今書院)。現在、百選外の棚田についての執筆準備のため全国行脚中。

四阿「与八」から眺めると、北戸田沢川を挟んで南北に分かれて分布しているのがわかる。南側の下段部分は、中央の農道を挟んで2枚ずつ4段の棚田が比較的整然と並んでいる。各段の高さは1・5メートルほど、土坡の法面で傾斜は10分の1程度。これに対し上段部分は、1枚ずつ3段と四阿の周りに3枚の棚田があり、段高は2メートル以上、傾斜は5分の1。1枚の広さは下段部分が3×10メートル、上段部分は10×20メートルもあり、大きな棚田である。区画が整然としていることとあわせ、畝町直しが行なわれたことを窺

わせる。用水は背後山地からの溪流を水源としているが、水不足になったことはほとんどないとのこと。(注3)

一方、北側の棚田は6段になっているが、1枚の広さは1〜5[㍓]、形や方向もばらばらで整備されていないことがわかる。段高は2[㍓]以上、土坡の法面が大きく見える。これらのほかにも、四阿の上に6枚、南側の山陰に8枚ほど耕作されている棚田があるが、耕作されているのはごく一部でかなりの面積の棚田が放棄されている。棚田の形状をかるうじて残しているが、オニグルミなどの樹木が育ち、一面イタドリ雑草で覆われている。ところどころに背丈の高いヤマウドが立ち上がり白い花を目立たせ、放棄地の虚しさを訴えているかのようである。

棚田の先に広がる日本海は、一段と明るさを増した空の下で鉛色から濃紺の海にかわっていた。南端にぼんやりと粟島が浮かんでいるが、晴れた日にはその先に大佐渡の島影をも視野に入れることができるそうだ。

棚田を耕作する二軒の農家

四阿で休んでいると、午後からの作業のため区長の奥井厚さんと集落の長老佐藤和茂さんが軽トラで上がってきた。作業を遅らせることのないよう、二人から要領よく話を聞くことにした。奥井さんは60歳、58歳の奥さん、市役所に勤務する長男夫婦と3人の孫、あつみ温泉で働く長女の8人で暮らす兼業農家。58歳で農協を退職するま



左／『山形県 棚田20選認定地暮坪』と書かれた案内板
下／日本海を望む暮坪の棚田



左／生産者の佐藤和茂さん(左)と奥井厚さん(右) 右／あずまや「与八」

では、機械での作業は行ってきたが、もっぱら奥さんが田畑の面倒をみてきたという。現在は奥さんと二人で農業を主業とし、1畝の水田耕作と「温海かぶ」で知られる赤かぶを3か所で栽培。水田は70〜80枚あったものを1970年代後半に個人で24枚に畝町直しをしたので、現在は1枚が平均4[㍓]、大きなものは10[㍓]を超えるものもある。これらを乗用型トラクター(15馬力)、畦塗機、歩行型4条田植機、バインダーを使用して耕作。収穫したイネは杭掛けにして天日乾燥しているそうだ。

佐藤さんは77歳、75歳の奥さんと二人で暮らす専業農家。外へ勤めに出たことはなく、かつては1・5畝の水田と50[㍓]の畑を耕作していた。現在は、40枚を10枚に畝町直しをした50[㍓]の水田と50[㍓]の畑を耕作

そのほか3か所で奥井さん同様赤かぶをつくっているそうだ。(注4) 機械類は乗用型トラクター(20馬力)、乗用型4条田植機、バインダーを所有。畦塗機は持っていないので、奥井さんが佐藤さんの田圃も一緒に作業を行い、反対に佐藤さんは奥井さんの田圃の代掻きを手伝っている。これは、この地区で2戸だけになった水田耕作での「結」ということができるだろう。

二人が栽培する赤かぶは、「温海かぶ」として全国に知られており、400年前から焼畑・自然農法で栽培されてきたという。各家はかぶの栽培場所を4〜5か所持つており、1か所につき5年か6年に1回という割合で利用している。その作業は7月上旬に放棄されていた土地の下草を刈り払い、これを乾燥させ8月上旬に火入れ

して中旬に播種、10月上旬から11月中旬にかけて収穫が行われる。根菜類であるため、窒素分があると葉ばかりが大きくなるので水田跡地には不向きといわれる。そこで、棚田の法面やスギ林の伐採跡地などが利用され、火を入れて焼灰を得て必要とする燐酸・加里分を確保する。(注5) 二人は、放棄された棚田の法面を利用、焼畑によって赤かぶを栽培し、それぞれ1トンずつ生産しているそうだ。

半農半漁といわれる暮坪の集落であるが、現在は戸数83戸、そのうち農家が26戸、漁家が20戸、大工が10戸、残りが農地を持たない勤め人という構成である。農家26戸は大部分が農地を自家菜園として利用する兼業農家。棚田を耕作しているのは奥井さんと佐藤さんの二人だけ、あわせて1・5畝の面積にすぎない。かつては26戸の農家が、1戸当たり50〜60[㍓]を耕作し、全体で16畝の水田面積があったとのこと。したがって、その10%ほどが耕作されているにすぎないということになる。

先祖が拓いた棚田を なんとしてでも残したい

このような現状を憂える二人は、棚田の存続には後継者の育成が急務と痛感されている。なにしろ、半農半漁の集落でありながら、子供たちは山の棚田へ上がってくることもなく、また磯で遊ぶこともないという。そこで、いま奥井さんの棚田を使っ

今回の棚田へは...

山形県鶴岡市 暮坪の棚田



暮坪の棚田へのアクセス

【自家用車】 関越自動車道・長岡JCTから北陸自動車へ。新潟中央JCTから日本海東北自動車道へ入り約36km進む。中条ICを県道591号線に入り、中条黒川バイパス/国道7号線を約82km進む。

【公共交通】 JR新潟駅から羽越本線・特急「いなほ」であつみ温泉駅下車。徒歩約35分。

集落の子供たちにイネ作り体験をさせる準備をしており、海岸では海水浴場を設けることが検討されているそうだ。また、集落背後にある200〜300畝の区有林に道をつけ、雑木林を利用したキノコ栽培や焼畑による赤かぶ栽培などに活用すれば、集落での生活に多少なりとも魅力を感じ、若い人が残るかもしれないと仰る。先祖が拓いた棚田をなんとかしてでも残したいという二人の思いは、悲願ともいえるものであり、達成されることを念じずにはいられなかった。

*注1

この集落を知ったのは山形県が「やまがたの棚田20選」を選定、その作業に当たった職員、高橋信博さんと国分厚さんらの指示によるもの。20選のなかで海に臨み最も景観の優れた棚田ということであった。

*注2

公園には「奥の細道」で芭蕉が詠んだ「あつみ山や吹浦かけて夕涼み」の句碑がたっている。

*注3

しかし、水温が低いいためか、水を各圃場に引き入れた後、「てあぜ」あるいは「よけ」を設けるかわりに畦シートを畦にそって巡らし、冷水が直接本圃に入らないようにしている。畦は畦塗機が使われ、整然とした形で固められている。

*注4

四阿のある土地は佐藤さんの休耕田地であり、「与八」は佐藤家の屋号。畑では、奥さんがあつみ温泉で毎日開かれてはいる朝市で売る各種の野菜やキク・ユリなどの花卉が栽培されている。

*注5

収穫せずに越冬した種採り用は、アブラナ科であるため花を咲かせると菜の花と見間違えるほど似ている。

調査プロジェクトレポート



■調査プロジェクトってなに？

2008年春に三井物産環境基金の助成を受けてスタートした、3年がかりのプロジェクト。全国の棚田保全に関わるグループを訪問し、聞き取りなどを行います。それぞれの棚田地域には、それぞれの歴史や特徴、課題があり、それを記録・整理し、今後の棚田保全や、棚田地域どうしのネットワークづくり、農山村と都市の交流の構築などへ活用できるようにするのが目的です。毎号、このコーナーで調査チームのレポートをお届けしていきます！

団体訪問は終盤に 地方在住の会員さんが活躍

今年度の調査活動もそろそろ終盤を迎えています。夏から秋にかけて8つの地域（兵庫・多可、大阪・能勢、熊本・山都、山口・周南、石川・輪島、静岡・菊川、岐阜・高山、鳥取・三朝）の棚田保全団体を訪問し、現地訪問はあと2カ所（佐賀・有田、新潟・川口）を残すのみとなりました。

今年の調査では、調査地域の近隣に住む会員の皆さんが大活躍してくれました。近畿地方の2カ所は大阪プロジェクトの中崎さん・扇田さんが、石川県輪島市は富山在住の助重さんが、山口県周南市は車で1時間くらい柳井市に住む榎本さんがメインで担当。東京から出かけて行ったものでは把握しきれない周辺の地域事情にも詳しく、今後のフォローも期待できそうです。

この活動は「学術的な調査」ではなく、ネットワークを作り情報を発信することによって棚田の保全活動を応援することが目的なので、こういった形で地域在住の会員が参加してくれるのは大歓迎なのです。対象となる地域・団体も増やして行きたいので、「私はこういう棚田保全活動をしています」「近隣の棚田でこ

Research Project Report 2009



左／山口県周南市
中須北の棚田
左下／周南市での
聞き取り調査
右下／静岡県菊川
市 上倉沢での聞き
取り調査

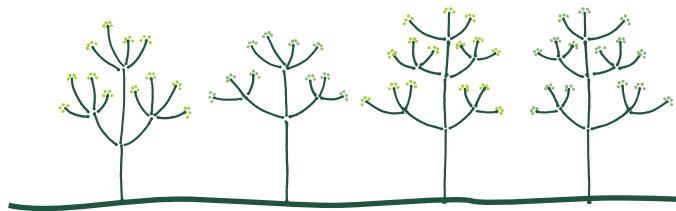


(高野 光世)

んな団体がこんな保全活動をやっています」等の情報がありましたら、ぜひぜひお寄せください。

というわけで、まだ大きな仕事が残っています。調査で集めた情報を、どのように整理して報告・発信していくかということ。そういった「情報の循環」があれば、棚田ネットが調査活動をやる意味はないと言ってもいいくらいです。まずは情報をまとめるながら、発信する際の基準と注意点について検討して行きたいと思っています。

棚田ネットワーク Project & Topics



Project 岐阜県恵那市 棚田ビオトープ プロジェクト

棚田ビオトープの整備



手あぜ掘りと石垣の除草

12月19日(土)10:00から森林近くの棚田ビオトープの拡張整備をしようと思いましたが、連日の積雪で延期。翌年1月11日(月祝)に整備を行いました。しかし、この日も棚田が凍っているため重機を入れることができませんでした。岐阜県立国際園芸アカデミーの学生さんが参加してくれたので、手でできる作業として森林近くの棚田ビオトープの手あぜ掘りと石垣の除草をしました。石垣近くの土は重たく、また、石垣は植物の根が入り込み土が堆積していました。石垣は崩れかかっている所

もあるので、それを掃除するのに冬はぴったりです。作業はお昼で終了。

同封のチラシのように、3月20日(土)から21日(日)にかけて棚田ビオトーププロジェクト岐阜恵那「第3回かえるの卵を探そう!」を開催します。講師のお話を聞いたり、ヤマアカガエルの卵塊を探したりといった企画です。ぜひご参加ください。

(相田 明)

Project 栃木県茂木町 茂木プロジェクト

春を待つ岩ノ作棚田



凍結した田んぼ

この冬は何年ぶりの本格的な寒さで、活動の現場「岩ノ作棚田」のトンボ池は暮れから1月半ばまで全面凍結しました。小深集落の人たちに「子どもの頃は、岩ノ作棚田でスケートをして遊んだ」という話を聞いていましたが、その話が納得できました。近くを流れる木須川も日陰では表面が凍っています。

立春を過ぎて、南向きのあぜではオオイヌノフグリが紫色の小さな蕾を膨らませ始めました。この棚田のマスコット「ホトケドジョウ」も元気に冬越ししています。間もなくニホンアカガエルの美声が聞けそうです。

今年の活動も、2月13日の「篠竹刈りと餅つき」

から本格的にスタートします。大きなイベントとしては、春の生きもの調査(4月)、体験稲作り田植えと初夏の生きもの調査(5月)、稲刈りと秋の生きもの調査(9月)、収穫祭(11月)を計画していますが、その間の月には、月例生きもの調査と棚田・里山保全ボランティア作業もあります。

この活動も6年目を迎えます。今年のモットーは「棚田で遊ぼう、棚田で学ぼう」です。田植えのときに植えた一本の苗(一粒の種モミ)から、秋には何粒の米がとれるか、という実証試験も計画中です。たくさんの方々の参加をお待ちしています。(安井 一臣)

Project 大阪市中央区 大阪プロジェクト

大阪府と遊休農地解消コラボ



大阪府豊能町の遊休棚田

2009年、大阪プロジェクトの主要メンバーである「棚田むすびの会」と「上田米穀店」は、棚田ボランティアや棚田オーナーによる米作り、棚田応援米の販売などで年間56日以上活動し、メディアでの紹介も新聞、ラジオなど12媒体、19回を数えました。その結果、関西での知名度が少し上がったせいか、自治体の方や市議員の方などから声をかけていただけるようになってきました。

その中のひとつが大阪府の「遊休農地解消に向けた取り組み」の一環で、大阪府豊能町(とよのちょう)の棚田の休耕田を活用する共同プロジェ

クトが立ち上がろうとしています。

現地は写真のように雑草だらけで、本来ならば稲作で復田するのが望ましいのですが、農家さんに負担をかけず独力でそれを行うことは極めて難しいので、別の方法での活用を検討しています。

その候補になっているのが「真菰(マコモ)」の栽培。かつてこの水辺にも生えていた葦に似たイネ科の植物で、水質浄化作用があるといえます。棚田でマコモを栽培することで、水田の体裁を保ち、耕作放棄地を「耕作準備地」にする狙いで、計画を進めています。(中崎 義志晴)

Topics 東京ビッグサイト エコプロダクツ展に参加



棚田について熱心に質問する来場者

第11回エコプロダクツ展が東京ビッグサイトで12月10～12日の3日間開催され、当会も5回目の出展をしました。今回は企画展『農の力』に出展依頼があり、ブースも4小間分と大変な豪華版でした。前回までは0.8小間ほどでしたので嬉しい限りです。

ブースでは、活動内容をパネルで展示。他には、全国各地の棚田米を3合ずつ袋詰めした当会オリジナル商品「棚田応援米」の販売。

当日は、十日町市池谷で農業研修中の粉山さんや、大阪から棚田むすびの会の扇田さん・中崎さ

んも応援米の販売やPRにあたってくれました。談話コーナー「あぜ道」は来場者が立ち寄り、中島代表と意見交換や談笑の場に。また、棚田米の美味しさを知ってもらおうと、一日3回試食を提供。茂木町岩ノ作と十日町池谷。どちらも大好評でした。

不慣れな豪華版ブースの取り組みでしたが、来場者から励ましや、活動に参加したいなどの声をたくさんもらいました。『農の力』を信じて活動するグループと、『農の力』に関心を寄せる来場者の熱気、そしてインフルエンザ対策の白いマスクが交錯する会場でした。(木戸 幸子)

日本の「まっとうな食」を考えています

雑穀は 棚田を守る

雑穀は荒れた土地や耕作放棄地でも栽培が可能です。
雑穀は強い作物なので、農薬を使わなくとも育ちます。
また、背が高いため、除草効果もあります。
雑穀の種子の提供は、アグリツーリズム協会まで。

棚田を守り、そこから穀物を食べる人を育てていくこと…
これもわたしたちの大切な役割です

わたしたちは、CSR活動の一環として、「日本の環境を守る象徴としての棚田」を残していくための活動を各方面で行っています。



販売元



Beautiful Japan, Beautiful Rice Island.

ライスアイランド

<http://agritourism.jp/>

アグリツーリズム協会

検索

NPO法人アグリツーリズム協会

東京都千代田区有楽町2丁目10-1
東京交通会館1F
【農'Sギャラリー内】
TEL:03-3214-1137
FAX:03-5288-7701 担当:出島

ありがとう十六穀など各種雑穀、
全国のスーパー・食料品店 他
でお買い求めいただけます。



わたしたちと「棚田の応援団」やりませんか！

棚田ネットワークは「棚田の保全に協力したい!」という会員によって自主的に運営されているNPOです。消えゆく美しい「棚田」をどのように保全していくことができるのでしょうか？一緒に考えませんか？ぜひ、私たちと棚田の応援団になりましょう！

会員になる!

会報紙「棚田に吹く風」(年6回)やイベント案内お届けの他、棚田ネットワークが主催する各プロジェクト(イベント)への参加や、スタッフとしての活動もできます。

年会費

〇個人会員

維持会員	1口1万円(1口以上)
一般会員	3,000円
学生会員	2,000円

法人会員を募集しています!

私たちの活動にご支援・ご協力をいただける、企業、団体、事業主さまを募集しています。
詳細はお問い合わせください。

年会費

〇法人会員
1口3万円(1口以上)

この上のスペース(ページ上1/2サイズ)は法人会員さまのPRスペースとして広告や広報にご利用いただけます。是非ともご入会ください。お待ちしております。(詳細はお問い合わせください)

代表の総力取材！
今号の表紙や特集に使われている白黒写真。実は、棚田ネットワークの調査プロジェクトチームが、調査地の静岡県菊川市上倉沢から持ち帰った1960年代の貴重な写真です。編集部では、今の日本では決して見られないこのノスタルジックな写真を、ぜひ会員の方々にも見てもらいたいという今回の特集を組みました。そこで写真に添える、当時を知るおじいちゃん、おばあちゃんのエピソードをとりたいたと中島代表に相談したところ、早速現地まで取材に行くと言われます。現地まで行くのは大変なので、電話で取材してくださいとお願いすると、「それじゃ迫力が出ないだよ」と一言。か、かっこいい。御年76歳とは思えないフットワークの軽さで、あつという間に愛媛県西条市千町と上倉沢の方のコメントをとってくる行動力は、さすがとしか言いようがありません。まさに代表総力取材！写真に見られる懐かしい風景を二つでも残したいという熱いメッセージが込められているようです。

ウェブサイトも見てください!

棚田の基礎知識や、棚田ネットワークの活動内容、イベント情報、ブログなど、盛りだくさんの情報を発信しています！是非のぞいてみてください!

www.tanada.or.jp



ブログも
随時
更新中!



2010年2月号 Vol.69

発行



特定非営利活動法人
棚田ネットワーク

〒160-0023
東京都新宿区西新宿 7-18-16 トーシンハイム 704 号
Tel / Fax 03-5386-4001
e-mail : info@tanada.or.jp URL : www.tanada.or.jp